慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カール・ポパーとブライアン・マギーとの思想的対話
Sub Title	An Intellectual Dialogue between Karl Popper and Bryan Magee
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1974
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.47, No.2 (1974. 2) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19740215-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カール・ポパーとブライアン・マギーとの思想的対話

奈良和重

一

現代イギリスのブリリアントな思想家として、あるいは著述に、あるいはラジオやテレビのインターヴューに多彩な活躍をつづけているブライアン・マギーが『新しいラディカリズム』『デモクラシー革命』を著わしたのは、今を去る十年以前のことである。(1)

今日でこそ、ニュー・レフトの解放的な思想や切迫した願望として、これらの言葉は余りにしばしば語られてはいるものの、当時としても新しいラディカリズムやデモクラシー革命に期待を寄せて、右の著書の標題に魅惑された人びとは少なくなかつたであろう。その結果は、おそらく鬱憤を晴らすどころか、彼らはむしろ裏切られたという感じを抱かされたことも否定できない。しかしながら、彼を低俗陳腐な思想家として葬りがちなわれわれは、彼が何も新しいことを言おうとしたのではなく、常識を公然と言う勇気を持つた思想家であり、確固たる理論家であることに気付き、つきの言葉に深く印象づけられたはずである。「わたくしの思想に与えた最大の直接的な影響力は、いま盛んに活躍しているカール・ポパーからであ

り、それは深く、かつ隅々にまで浸透した影響力である――彼にわたくしは感謝しなくてはならない。わたくしは、自分が書いたものに独創性を何も主張していない。他の人びとの思想をあるひとつの政治哲学へと吸収すること、それ以上のことをわたくしはしたわけではない。しかしながら、これこそ、わたくしが提言するものであることを恥じないほど怠務なのである」と。[2]

この度、「現代の思想家」叢書のなかにマギーは『カール・ポパー』[3]を執筆しているが、ポパー論としてまことに簡明であり、彼にしてはじめて書き得る面目躍如たるものである。わたくしは改めて彼の著書を読み直し、過去のイデオロギー的思考の呪縛や言葉の虜囚を否認して、それらとの訣別を決断的に宣言した、二人の思想家の《対話》を有意味なものならしめたい。それがこの小論の目的である。

(1) Bryan Magee, *The New Radicalism*, New York, St. Martin's Press, 1962 : *The Democratic Revolution*, London, The Boldley Head, 1964. (以下 *N.R.* および *D.R.* と略記)

(2) *N.R.*, p. 15.

(3) Bryan Magee, *Karl Popper*, New York, The Viking Press, 1973. (以下 *K.P.* と略記)。

二

「保守主義およびマルクス主義の主要な誤謬から解放された、今日現にある世界にとつて適切な、社会的にも思想的にも革命的な二十世紀の発展を充分に説明するダイナミックな哲学」――もしもそのような哲学が構想されるとしたならば、「右翼対左翼」「改良対革命」「資本主義対社会主義」……といつた十九世紀的な言葉や範疇でもつて語ることはもはや不可能であろう。[1]「新たに思考すること」[2]――これがマギーの標榜するモットーである。

われわれにとつての最大の脅威は、「イデオロギー的惰性」と呼ばれるものである。「保守主義は生活様式としてイデ

オロギー的惰性である。共産主義にしても……同様である。デモクラシーと科学――それらは伝統的な資本主義を見分けがつかぬ程に変化させた――は、伝統的な共産主義を同じく徹底的に形態転化させつつある。それらはほぼ確実に、ナショナリズムと相俟つて、ダイナミックなものの多くを準備し、発展途上にある諸国における主たる革命的担い手となるであろう[3]」。このように、《政治的デモクラシー》と《テクノロジー的進歩》に確信を抱いているマギーは、現代のいわゆる豊かな社会の矛盾、不安、絶望を眼のあたりにしているわれわれにとつて余りにオプティミスティックに過ぎるかに思われようが、「未来に関するオプティミズムは非合理的ではなく、事実に合致している[4]」という彼自身の現実認識は鋭い。『デモクラシー革命』をたんなる自己満足と受け取つてはならない。

確かに、デモクラシーとテクノロジーによる創造意志は、人間の悲惨な困窮、悲痛な受動性を克服する方途であつた。それらは、「原初な人間の条件からの人類の mass exodus[5]」として、今後われわれに大胆に選択する態度を可能ならしめたのである。「現実的な状況における現実的な判断と現実的な責任[6]」をつねに強調するマギーは、一方において古典的資本主義の変貌と、他方で共産主義のイデオロギー的幻想とを確認して、それらをともに廃棄すべきことを要請する。現在、デモクラティック・レフトに欠落しているものは、まさに「ラディカルな衝動と想像力[7]」であつて、この「想像力の大胆さ[8]」というものは、後程明らかにするように、ポパーの科学的方法にとつて、最も重要な行為なのである。

ところで、マギーのいう《ラディカリズム》とは、《社会主義》という言葉の曖昧性を避けて、自己の思想的立場を明晰化するためにのみラベルとして使用されているにすぎない[9]。事実、彼が指摘しているとおり、バートランド・ラッセルからジョージ・オウエルに到るまで、社会主義の規定は多種多様であり、あるいはまつたく異なつたものを意味している場合さえある。したがつて、言葉それ自体は何ら重要な問題ではない。マギーは言葉の魔術を軽蔑し、『開かれた社会とその敵たち』の著者の言葉を引用する。「何ものも言葉に依存せず、あらゆるものは、われわれの実践的要求、もしくはわれわれが

採用しようと決意する政策を作るための提案に依存する、とわたくしは信じる」[10]と。

右と関連して、マギーはポパーについてつぎのように語つている。かつてポパーはオーストリア社会民主党の活動的メンバーであつた。しかし彼は、党のマルクス主義的偏向、とりわけ生産手段の国有化という党の綱領が、意図された問題を解決せず、却つて党が高揚する諸価値を破壊する結果を招くであろう、と確信していた。結局、ポパーは社会民主党に幻滅させられたが、それは当時の知的混乱によるというよりもむしろ、党が労働者を暴力にさらすその方法、指導者たちの責任に対する恐怖、そしてとくに、ナチスの権力掌握に抵抗しなかつた共産主義者たちとの共犯性のゆえにであつた。「爾来、彼は社会民主党に不信を抱きつづけている。彼は今日、強いて言わせれば、言葉の流行遅れの意味でのリベラルとして、みずから述べるであろう。そしてここに、わたくしはひとつの関心を表明しなければならない。わたくしは社会民主主義者であつて、若きポパーは、ほかの誰もかつてなさなかつた程、社会民主主義の哲学的基礎はいかにあるべきかを苦心して仕上げたのだ、とわたくしは信じている。そして彼のように、こうした思想が、マルクス主義と自由主義的傾向をもつたオポチュニズムとの歪められた混合物――それがデモクラティック・レフトの政治理論と見なされている――に代置されるものを見たいものである。要するに、わたくしとしては、ポパーがもはや社会主義者ではないことを明確化しつつも、……社会民主主義に対して彼の思想を要求したいのである」[11]。

リベラルであれラディカルであれ、名称はどちらでもよい。《ラディカリズム》によつてマギーが何に依拠し、何を目指しているかは容易に推測されよう。「非マルクス主義的左翼のもつ最大の脆弱さのひとつは、イデオロギー的劣等感である。思想的不安定の感覚が、マルクス主義よりも一層強力かつ主導的で、同時にラディカルな変革を生みだす現存社会に対するアプローチへの不相応な要求の感覚が瀰漫している。かかるアプローチが存在する……という自覚は、自己確信と大胆さの量り知れない増大を、新しい政治的有効性の輸血をもたらすであろう。それはまた、労働党に新たな統一性――共通の

見地の統一性――そして明確な同一性を与え得るであろう」[12]。われわれが見るのは、革命家の激烈な言辞を弄する遊戯ではなく、過去の追想に生きる思想的ヒロイズムを押し殺し、未来の思想に生きようとする、ひとりのラディカルな思想家の熱意と信念である。彼は、イギリス労働党の脱マルクス主義化を志向しつつ、具体的な批判を展開する[13]。

(1) *N. R.*, p. 226.
(2) *D. R.*, p. 31.
(3) *Ibid.*, pp. 120-121
(4) *Ibid.*, p. 123.
(5) *Ibid.*, p. 116.
(6) *N. R.*, p. 47.
(7) *D. R.*, p. 31.
(8) *K. P.*, p. 63.
(9) *N. R.*, p. 68.
(10) *Ibid.*, p. 30, *Karl Popper, The Open Society and Its Enemies*, (revised and enlarged ed.), London, Routledge and Kegan Paul, 1952. Vol. 1. p. 91,
(11) *K. P.*, pp. 80-81.
(12) *N. R.*, pp. 71-72.
(13) 『新しいラディカリズム』を執筆する理由として、第一に明確に理解され得る政治哲学を構想すること、第二に労働党がその基礎に立つて政策立案を行うこと、第三にそれを選挙民に向つて鮮明に具体化することがあげられている。本書は直接的には、イギリス労働党への批判であるが、より一般的には、「左翼的思考の基礎そのものを再検討する試み」(*N. R.*, P. 12) である。

三

イギリスの労働党はマルクス主義的伝統の外側にあつた唯一の社会主義政党である[1]、ということは周知のとおりである。イギリス社会主義の伝統を支えてきたのは、ロック、ペイン、J・S・ミルの系譜に属するリベラリズムであつた。自由党

の衰退と表裏する労党働の抬頭が、これを見事に証示している。[2] ブライアン・マギーは社会主義思想史を論じているわけではないが、フェビアン社会主義やギルド社会主義がイギリスの思想的傾向に与えてきたインパクトを見逃すことはできないであろう。[3] ともかくロシア革命までは、労働党が非マルクス主義的であつたこと事実であり、すでに労働運動の指導的地位を占めていた者の多くは、ひきつづき反共産主義的態度を堅持していた。一九二〇年に結成されたイギリス共産党は、労働運動への浸透をはかつたが、地方的レヴェルでの組織内部の闘争にとどまつていた。

ところが、革命以後の世代は「労働運動史上、マルクス主義によつて支配された唯一の世代」[4]となつたのである。二大戦間に政治的成熟を遂げた人びとは、世界的規模での経済恐慌、自由主義的諸制度の解体、そしてその廃墟に立ち現われたファシズムの脅威を体験した。このおぞましいカタストロフを彼らがどう受けとめたか――これを説明する社会理論はマルクス主義以外にはあり得ない、マルクスの予言は真実となつたかに思われた。若い社会主義者たちは相ついでマルクス主義に接近し、あるいはマルクス主義者となり、あるいは共産主義者と同調した。例えば、H・ラスキ、J・ストレイチ、V・ゴランツ、D・G・H・コール等、労働党の卓抜した人物が一九三〇年代には、マルクス主義的外観を呈するようになつた。マルクスの資本主義体制の批判からプロレタリアート革命にいたるまで、さらにスペイン内乱と人民統一戦線にわたつて、当時の社会主義者の脳裡に沈潜したものが、今となつては「悲痛と郷愁」[5]として甦えるのも、けだし当然と言えるであろう。

マギー自身にしても、個人としてのこのような態度は、たとえ正当化され得ないとしても、理解可能であることを認める。また、戦後一九四五年から五一年にかけての労働党内閣が実行した綱領、国有化、福祉国家化の諸成果を評価していないわけではない。問題は、三〇年代の社会主義者が、労働党、わけても労働運動に強力な影響を及ぼし、六〇年代および七〇年代の現在においても、「マルクス主義的遺産」を依然として残していることなのである。「事実、わたくしの経験が示

唆するところでは、労働党の活動的な党員を全体としてみると、知識人の大多数は、彼らの社会的・経済的諸前提において、顕著にマルクス主義的である。もしも誰かがこの事実を疑うのならば、どの労働党の年次大会でもよいから演説を聴いて見給え[6]」とマギーは身にしみた忿懣を隠し得ない。彼らの理論的前提なるものを簡潔に列挙してみれば、つぎの如くである。[7]

一、社会に関する一切のものは、生産・分配の手段によつて究極的に決定される。
二、政治理論の本質には、所有形態にかかわるものが含まれている。したがつて、社会主義の本質は公的所有と分配にほかならない。
三、社会生活は政治経済と同じ外延関係にあり、哲学、宗教、芸術、教育、文化、犯罪にいたるまで、政治・経済的現象と見做してはじめて明らかとなる。
四、したがつて、われわれ自身がかかわる唯一の問題は経済問題であつて、それを解釈すれば、他の問題はおのずから是正されるであろう。
五、資本主義は必然的に戦争を発生させる。
六、資本主義は必然的に大量失業を発生させる。

この「マルクス主義的遺産」に依拠して、国家所有が一層多くなれば、それだけ左翼的であり、《進歩的》であるということは、右の最初の二つの前提が真である場合にかぎり有意味であろうが、それはまつたく観念的形象にすぎない。

マギーはロシアとイギリスの現実を対照させ、所有形態によつて社会が決定されるという虚妄と錯誤を明示しているが、これは前節のポパーが懸念したところと軌を一にしている。にもかかわらず、マルクス主義的思考の枠組に停止させられた労働党は、いたずらに oppositions-minded となり、「トータルな非難」を投げつけるその態度には「神経症的徴候」すら窺える。[8] 現代の歴史的変化に対応し、問題解決の実践的役割を果しているのは、むしろ保守党である。このパラドキリカルな状況、その一例をあげれば、社会主義者や労働組合の反対を押し切つて、ヨーロッパ共同市場へのイギリスの加盟を実現させたのは保守党であつて、「こうした問題については、左翼と右翼は攻守ところを変えている。この事実は、労働党内部に一層完璧に起つている。社会主義者は伝統主義的になればなる程、《左翼》の側にいると思いなしている[9]」と言われるごとく

にである。

「ラディカルな政党の創造」こそ緊急課題であろうが、予見し得る未来にラディカルな政府を構成する希望を托すべき唯一の政党は、やはり労働党を措いてほかに無い。それゆえに、「労働党は社会を変革するために存在する。そしてそれを実行するためには、政府とならねばならない。このことは、現にある社会に対して責任を引き受けること、またそこから出発することを意味する」[10]とマギーは強調する。「責任を引き受けること」は、具体的状況において諸困難を評価し、決定する政治的態度であり、マルクス主義者にかぎらず、知識人に特有な「困難一般を解決するような政治的態度」[11]ではない。

さらに付言しておきたいことは、アヌリン・ベヴァン氏が一九五九年の党大会において、「いわゆる豊かな社会とは醜い社会である。それは世俗的な社会である……」と糾弾したことに対して、マギーは、社会主義者は人びとを貧困と考えることを止め、世俗的と考えるようになつた、と指摘している点である。もう一つは、社会主義的伝統のうちにあるピューリタン的要素、それは現実世界を悪と同一視する。[12]このようにみずからに優越を感じて自己聖化し、他者を俗悪化する傾向は、世俗化した時代の政治における聖性と俗性との異様な倒錯を生みだしがちである。マルクス主義もこれと無縁ではなく、より一般的に言えば、「科学に対する敵意と理性への反抗」[13]という形で表現されている。

では、マギーのマルクス理解、そしてその批判の論拠は何処にあるのか。

(1) *N. R.*, p. 86.
(2) *Ibid.*, p. 79.
(3) この点に関して、マギーは一言も触れていない。彼にとつての問題は、過去の思想運動の正しさを確証することにあるのではなく、むしろ現在のそれの何が悪いかを証明することにあるからであろう。
(4) *N. R.*, p. 87.
(5) *Ibid.*, p. 174.
(6) *Ibid.*, p. 110.

(7) *Ibid.*, pp. 92-93.
(8) *Ibid.*, p. 125.（「政治の心理学」というレヴェルで一般に識別される動機づけとして、マギーは以下の諸特徴をあげている。㈠自分より幸運な人びとに対する嫉妬と怨恨、㈡権威への憎悪、㈢復讐心、㈣不安感、㈤有罪性、㈥審美主義、㈦未成熟、㈧衒学癖、㈨代理宗教への必要性、がそれである。詳しくは *Ibid.*, pp. 126-138参照）。
(9) *Ibid.*, p. 163.
(10) *Ibid.*, p. 141.
(11) *Ibid.*, p. 44.
(12) *Ibid.*, pp. 143-144.
(13) *K. R.*, p. 99.

四

マルクスによれば、資本主義の歴史的機能は社会の工業化であり、それを果し終えた後にはじめて共産主義が到来する。ところが現実世界においては、共産主義への移行は、先進工業社会において生起せず、そこではマルクスの認めたプロレタリアートがそれを拒否した。逆に後進諸国においては、共産主義が社会を工業化するアピールとして積極的役割を演じている。さらにマルクスの理論にしたがえば、資本主義の害悪は、労働者から剰余価値を搾取し、窮乏化させることだが、実際には資本主義は、幾多の没落の危機に見舞われながらも、労働者に豊かさをもたらした。それに反して、共産主義はまさに《国家資本主義》であつて、その後進性を克服するための強制は、政治的にも経済的にも、労働者を抑圧しつつある。いずれにしても、マルクスの予測は誤りであることが証明された以上、(1)マルクス主義理論は擁護できない、(2)共産主義的実践は害悪である、(3)共産主義の現実はマルクス主義理論と矛盾する、(4)非・共産主義的社会の発展はマルクス主義理論と明瞭に矛盾している、といつた批判は妥当していよう。マギーもこれらを容認してはいるが、[1] それはたんなる素朴な実証主義的立場からではない。この点で、しばしば誤解されているように、ポパーはけつして実証主義者ではなく、「決定的な反実

証主義者」であることに注目しなければならない。[2]

実証主義的であると言うのならば、マルクスの『資本論』は「イギリスにおける産業革命史」、あるいはその「批判的分析」として、きわめて正確かつ事実的資料を多く含んでいる。十九世紀前半のイギリスにおける労働者の現状は、まさにマルクスの記述したとおりであり、それとともに彼の情熱と深いヒューマニティの湧出した表現は感動的でさえある。しかしながら、すべての革命家のうちで最も偉大な理論家の究極目的は「社会の運動の自然法則」[3]を発見することにあつた。「生涯にわたりマルクスによつて苦心して仕上げられたマルクス主義の要点は、それが科学たろうとすることである」。[4]『経済学批判』序言から「経済的基礎が変化すると、それとともに巨大な全上部構造が、ゆつくりと、またすみやかに、変革される。このような変革の考察にあたつては、つねに経済的諸条件における自然科学的に正確に確認することのできる物質的変革と、こ人間がこの闘争を意識して、それを戦いぬこうとする諸形態、すなわち、法律的、政治的、宗教的、芸術的または哲学的、要するにイデオロギー的諸形態とを区別しなければならない」[5]という引用に、マギーはわざと強調符を付しているゆえんである。

マルクスは、生産手段の発展を歴史的発展の決定因とする社会（経済）科学への理論転換をめざした。かくして、あたかもニュートンが自然の運動法則を定式化したと同じように、歴史の発展法則を定式化し、それに基づいて科学的な歴史的予測を行つたのである。「彼は歴史的変化の科学的法則を発見したので、太陽系のいつさいの未来の状態をわれわれが予測できると同様に誤りなく、共産主義に到るまでの、またそれを含めての社会体制のいつさいの未来の状態を予測できたのである。このことが、彼が社会主義を科学的基礎のうえに据えたと言うことによつて意味した当のものである。決定的な意味において、彼は社会主義ないしは共産主義を《擁護》したのではなかつた。ニュートンが太陽の次の蝕を擁護したのではないと同様に。彼は、それを必然的にもたらす因果法則を発見したのであつた」[6]という解釈は、皮相でもなければ時代遅れでも

ない。[7] そして、ポパーが厳しく批判した「歴史主義」の核心が、ここに集約されていると言つてよい。[8]

不幸なことに、マルクスは科学的方法を決定論と同等化した。だが、ポパーの主張するように、決定論というものは、自然の整合性の原理、あるいは普遍的な因果法則として表現されようとも、科学的方法にとつて必要な前提とはもはや見なされていない。物理学においても、かかる前提は不必要であるばかりか、それと矛盾する場合すらある。厳密な決定論を採用すること自体、予測を可能ならしめる科学の必要条件ではないのである。ポパーは非決定論者であるが、[9] かかる科学概念をマルクスが抱いていたことのみを非難しているのではない。「マルクスを迷誤させたのは、決定論の抽象的かつ理論的な教説ではなく、むしろこの教説が彼の科学的方法、社会科学の目的および可能性についての見解に与えた実践的影響である、ということを銘記しなければならない。社会的発展を《決定》する《原因》という抽象的観念は、それが歴史主義に導かれないかぎり、まつたく無害である」[10] からである。

歴史主義の政治に対するアプローチは、『歴史主義の貧困』のなかで論駁されている「ユートピア主義との不神聖同盟」である。「歴史主義とユートピア主義との同盟における最強の要素は、疑いも無く、両者に共通している全体論的アプローチである。歴史主義は、社会生活の諸側面の発展ではなく、《全体としての社会》の発展に関心を寄せる。そして、ユートピア的工学も同じく全体論的である」。[11] マルクス主義に対するポパーの反論は、マギーが述べているように、右のような政治の領域におけるユートピア的アプローチ、つまり、理想的な設計図にしたがうトータル的な社会変革にほかならない。「〔大規模な組織を〕すべて直ちに一掃することは、文字通りに世界解体（カオス）を創造することであろう。またどうにかしてそこからある理想社会が出現するだろうと信じることは、狂人と踵を接する」[12] とマギーはポパーのために弁証している。

(1) *N. R.*, p. 65.
(2) *K. P.*, p. 42.

(3) マルクス『資本論』第一版への序言　長谷部文雄訳（青木文庫版）第一部第一分冊七三頁。
(4) *N. R.*, p. 82 および *K. P.*, p. 92.
(5) マルクス『経済学批判』序　向坂逸郎訳マルクス・エンゲルス選集（新潮社）第七巻五四―五五頁。
(6) *N. R.*, p. 83.
(7) ポパー（あるいはマギー）のように、《科学的》社会主義としてマルクス主義を把握することは、例えば最近の西欧マルクス主義、とりわけニュー・レフトの傾向的解釈が《科学》から《哲学》へと逆流していることに対して、正統的な解釈である。マルクスのドイツ観念論、ヘーゲル哲学批判の目的は、『ドイツチェ・イデオロギー』に明示されているとおり、《哲学》から《科学》への認識にあつたからである。すなわち、「観念的な思弁が止むところ、すなわち現実の生活においては、現実的な意味を持つ現実に即した学問、すなわち、人間の実際活動の描写、人間の実際の発展過程の描写がはじまる。意識についてのさまざまのきまり文句は消滅する。そのあとには現実に即した知識が現われなければならない。現実の描写がはじまると共に、これまで独立の存在をつづけて来た哲学はその存在の基礎を失う」（『ドイツチェ・イデオロギー』高橋義孝訳　同選集第三巻一五二頁）。
(8) *K. P.*, p. 36. ポパーの歴史主義批判に関しては、奈良和重『歴史的予測と社会的実践の科学性について』本誌第三十三巻第二号五四三―五六六頁参照。
(9) *K. P.*, p. 97.
(10) Popper, *The Open Society*, Vol., II., p. 88.
(11) Popper, *The Poverty of Historicism*, London, Routledge and Kegen Paul, 1957, p. 74.
(12) *K. P.*, p. 103.

五

ポパーはすでに早くから、科学的方法としての帰納的一般化を拒否し、「検証可能性と反証可能性との論理的非対称性」[1]を鋭く衝いていた。つまり、科学的理論なり認識は、経験的テストによつて実証化されることが重要なのではなく、たとえ検証不可能であるとしても、つねに理論をテストする可能性、反証可能性を持つていなければならない、というのである。さらに、われわれは、確証を堆積することによつてではなく、「想像力の行為」[2]によつて――無論それは厳密なテスト可能性に堪えなければならないが――大胆に新しい経験的世界へ向つて仮設を提示するのである。

こうしたポパー的概念を受け継ぎ、マギーは述べている、「理論をテストする方法は、それらの前提や構造を批判的検討にしたがわせ、他の諸々の理論に照らして慎重に考察して、それらの事実内容をテストすることである」[3]。そして、「《証明》された理論、すなわち、あらゆる既知の事実に符合する理論は、やがて照らし出されるはずの新しい事実によつて将来は反証されるかも知れない。いかに多くの観察がある仮説を支持しようと、次の観察がそれと矛盾することはつねに可能である。そして、もしも仮説と対立する唯一つの観察が確立されたならば、その仮設は変更されねばならない。だから、理論はその強い点ではなく、弱い点でテストされねばならない――それを確証する証拠ではなく、それを反駁する証拠を追求することによつて。どのような推測され得る証拠も反駁しようのないような理論は、テスト不可能である」[4]と。

ポパーおよびマギーによれば、いかなる理論体系も、科学である以上は経験的テストによつて反証可能である。反証されない絶対的確実性などあり得ないからである。マルクス主義が科学であるなら、この例外をなすわけではない。事実、先に示したとおり、マルクス主義は、その経験的内容を増すとともに、反証される可能性も多くならざるを得ず、マルクスの科学的予測はいまや反証されている。それにもかかわらず、マルクス主義が科学たることを要求し得るのは何故であろう。ここでマギーが、ウィーン時代の若きポパーが科学の「境界設定」の問題に到達したのは、ほかでもない精神分析学とマルクス主義であつた、と語つているのは興味深い。一九一九年には、アインシュタインの相対性理論がエディントンによつてテストされ、検証された時でもあつた。それとは対照的に、ポパーは、精神分析学者の観察はいつさいその理論と矛盾せず、あらゆるものが説明されていることに最悪の事態を見出した。他方マルクス主義者は、予測が反証されていてもそれを受容せず、反証化を寄せつけないように理論を涯し無く再構成していた。「……彼らの思想は、宗教的信仰の反証不可能な確実性を持つていた。彼らが科学的であるという主張は、いかに真摯であろうと、誤りであつた」[5]とポパーは思つたのである。

このように、ポパーは、マルクス主義者の科学たろうとする要求を科学的レヴェルで議論し、その論理的整合性を問うてい

る。そしてわれわれは、マギーのつぎの的確な指摘によつて両者の科学概念の乖離性を明示することができる。「方法論的レヴェルにおいて、われわれは……われわれの理論もしくはわれわれの証拠をともに合致させるために、たえず再構成することによつて、反駁を体系的に回避すべきではない。これこそ、多くのマルクス主義者が行つているものであり、精神分析学者にしても然りである。かくして彼らは、科学的であることを要求しながら、科学を独断論と代置しているのである。科学理論は、起り得るあらゆるものを説明する理論ではない。逆にそれは、起り得るであろうものの大部分を除外する。したがつて、除外する当のものが起れば、それ自身除外される。それゆえに、純粋な科学理論は、永遠にみずからを危険にさらす。そしてここにわれわれは、……ポパーの答えに到達する。反証可能性が科学と非科学とのあいだの境界設定の基準である」[6]。

いまやマルクス主義が、ポパー＝マギーの科学に対立して、非科学あるいは《前科学》[7]であることは明白であろう。しかもこの対立が、社会的実践と政治的方法のそれとにまさに照応している。マルクス主義が「開かれた社会」の敵たらざるを得ない理由は、政治の公的領域において、究極的・絶対的目的を確立し、いつさいの変化を停止させる権威主義に導かれるからである。それは自由を否定し、不寛容となり、反合理的かつ非人間的であろう。それに対して、ポパーの政治的態度はつぎの二つの原理に要約されよう。第一は「回避し得る苦痛を極少化すること」であつて、このアプローチは社会的害悪の諸問題に直接にかかわり、それを解決してゆくことで、「快楽の極大化」という功利主義のネガティヴな公理たるにとどまらない。第二は「個人が欲するように生きる自由を極大化すること」であり、社会生活の全領域にわたつて個人の選択と自由とを拡大化することにほかならない[8]。これらは、政治的実践において「漸進的社会工学」と呼称されているが、幾分軽蔑的な用語として受けとられがちであるにもかかわらず、ポパーの議論ほど人間的であり、情熱的なものは無い[9]。

「合理性、論理、科学的アプローチ、それらがこぞつてめざす社会は《開かれた》、そして多元的な社会であり、そこでは相反する見解が表現され、対立する目的が追求される。つまり各人が問題状況を自由に探究し、解決を自由に提案できる

社会であり、各人が他者の提案した解決、最も重要なのは、政府の解決――展望であれ適用であれ――を自由に批判できる社会であり、とりわけ政府の政策が批判に照らして変更されるような社会である。……もしも開かれた社会がひとつの現実となるとすれば、その最も基本的な要件は、権力を掌握している者が適当な期間に暴力なくして解任でき、異なつた政策をもつた人びとによつて交替可能であることである。そして、これが真正な選択であるためには、政府の政策と異なつた政策をもつ人びとが自由にみずから政権交替でき、それを引き受ける用意がなければならない[10]」。《デモクラシー》ということによつてポパーの意味したのはかかる社会である。

マギー自身は、ポパーと見紛うような表現でつぎのように述べている。「科学的展望は、……ある社会形態にわれわれをコミットさせる。それは、《自由な》社会と呼ばれてもよいものにわれわれをコミットさせる。真理の追求はラディカルな活動であり、自由においてはじめて遂行され得るのである。それは、権威と伝統的前提に対するたえざる批判的態度をともなう。それは、何ものをも最終的かつ疑問の余地なく、まして無謬と見做すことを拒絶する態度をともなう。それは、閉ざされた、完成された思想体系と両立せず、またそれが特徴的に生みだす固定化された政治目標とも両立しない。それは自由な探究、合理的議論、公開討論、言論と出版の自由――そしてこれらの結果として進んで信条を修正する態度をともなう。これらは革命的な要求である。殆んどの社会的、政治的、宗教的体制は権威に基礎を置いており、その体制にとつて、伝統的な諸前提に対する批判は最悪の犯罪である。なぜなら、それは《社会の基礎を崩壊させる》からである。それは批判に対して、《冒瀆》《背信》《異端》《修正主義》というような名前を与えて、通常は拷問か死を以て罰するのである[11]」。

「開かれた社会」にせよ「自由な社会」にせよ、それを保持しているのは権威とか伝統を批判する「批判の伝統[12]」である。「わたくしは、どのような合理的人間もポパーのマルクス批判を読んで、しかも、いかにしてマルクス主義者たり得るか、を認められない、と告白せねばならない[13]」というブライアン・マギーの言葉を、われわれは銘記しておくべきであろう。

(1) *K. P.*, p. 14. ウィーン学団の論理実証主義者たちが、検証可能性の原理によつて、言明の「意味」と「無意味」との境界設定としたことに対して、当初からポパーは激しい攻撃を加えていた。彼は、いつさいの形而上学が無意味だ、と主張したのではなく、それは真であるかも知れないが、それをテストする方法が無いのであるから、科学的ではない、と論じたにすぎない。*Ibid*, pp. 40-42 参照。
(2) *Ibid.*, p. 18.
(3) *N. R.*, p. 32.
(4) *Ibid.*, pp. 34-35.
(5) *K. P.*, p. 38.
(6) *Ibid.*, pp. 36-37.
(7) マギーに言わせれば、「偉大な《前科学的》思想家の最後の人――彼の科学的な自負心にもかかわらず、――はカール・マルクスであつた。つまり彼は、あらゆるもの――宇宙論、生物学、歴史、経済、政治、宗教、倫理、芸術、人間関係、家族関係、人間経験の総体――を説明しようとした、しかもそれをテストに照合することなく説明しようとした天才の最後の人であつた」（*N. R.* p. 33）。
(8) *K. P.*, pp. 81-83.
(9) *Ibid.*, p. 105.
(10) *Ibid.*, p. 74-75.
(11) *N. R.*, p. 38.
(12) *Ibid.*, p. 227.
(13) *K. P.*, p. 89.

六

結びに、イギリス放送協会でのポパーとマギーの対談の一部分を掲げておく。(1)

マギー　あなたの仕事について何も知らない人たちは、あなたの政治哲学があなたの科学哲学と少しも関係ないと仮定していても赦されるかもしれません。しかし実際に、あなたの為したことは、根底において、あなたの自然科学観を社会科学へと拡大することです――そうではありませんか。換言すれば、これら二つの明らかに異なつた領域でのあなたの哲学は、首尾一貫したものです。

ポパー　あなたが仰言つていることは恐らく、多くの共通した考え方があるということでしよう。例えば、政治においてであろうと、そのほか何処であろうと、わたしたちは常に誤りを犯します。だが、自分の誤りから学ぼうと努めることはできます。わたしたちの誤りから学び、かつ誤りを探し求める用意のあることを、わたしは合理的態度と呼ぶのです。それは常に権威主義と対立しています。政治の領域においては、あなたの誤りから学ぶという方法は、政府が採つた行為に対する自由な批判と討論に基づいた方法のことです。

マギー　そしてあなたは、まさにこの点に、多数の支配という概念ではなくて、デモクラシーの定義を基礎づけているわけですね。

ポパー　わたしはデモクラシーを定義したくはありません。そのうえ、多数など支配していません。どんな政党が選挙に勝つたところで、あなたもわたしも支配しているわけではありません。しかしわたしは、自分で二種類の政府を区別していることを説明すべきでしよう。その一つは、流血なくしてそれを廃棄できるものです。もう一つは、流血なくしてはそれを廃棄できない、多分まつたくできないものです。わたしは前者をデモクラシーと呼び、後者をタイラニーと呼ぶように提案します。だが、どんなものも言葉に依存しません。しかしながら、重要なことはつぎの点です。もしもある国が、暴力なしで政府を変更することを可能ならしめる諸制度を所有していながら、人びとのある集団が、暴力なしで成功しなかつたから、暴力を使用しようと試みるならば、彼らが何を考え、何を意図しようと、彼らの行動は、暴力によつて支持され、暴力なしに廃棄できない政府を樹立する企てです。換言すれば、彼らはタイラニーを樹立しようと企てているのです。これは明瞭なことですけれども、人びとは通常、それ程に考えていません。

マギー　あなたの政治哲学の相当部分が、なぜユートピア主義への攻撃という形をとつたのですか。

ポパー　わたしたちの社会生活のなかには、残酷、醜悪、愚昧、不正なものが沢山あります。何時でも改良のための余地が多くあるものです。人びとは常により善い社会を夢見ていますし、これらの夢のあるものは、社会改革を鼓舞しています。しかし、『開かれた社会』でわたしが示したように、完全な社会への夢想は危険です。ピューリタンたちも完全な社会を樹立することを望みました。ロベスピエールにしてもそうでした。彼らが成し遂げたものは、地上の天国ではなく、暴力的タイラニーの地獄でした。

マギー　政治哲学において無視されたあなたの発見の幾つかが、他の人たちによつて独自に再発見されております。例えばミロヴァン・ジラスですが、共産主義世界での指導的人物のひとりであつた後に、今日の古典となつた『新しい階級』のなかで、彼よりずつと以前にあなたが『開かれた社会』で発表された思想を提言しましたね。そしてふたたび、彼の近著『不完全な社会』の中味はついに、「社会は完全になり得ないというのがわたくしの信念である」という文章に露わに示されています。今では彼は、社会が完全になり得るという観念こそ、共産主義者によつて犯された根本的な過ちだ、と考えています。

ポパー　あなたはジラスに関しては正しいと思います。つまり彼は、他の人が批判的思考を経由して到達した幾つかの見解に、長年月をかけた苦悩と投獄を経由して到達したのですから。彼の帰結はさらに印象的で価値あるものでしょう。

マギー　しかもわたしたちは今日、有能な若者たちのあいだに、あなたが攻撃した当の作家や教義、ヘーゲル、マルクス、精神分析学、実存主義の顕著な蘇生を眼のあたりにしています。あなたはこれをどう説明なさいますか。

ポパー　賢者の石――わたしたちの病いのための秘法を探し求める傾向は何時だつてありました。現代の状況はけつして新しいものではありません――討論の合理性における悲しい没落を除いてはです。これは部分的には堪え難さによるものですし、部分的にはつぎのような感情によるのでしょう。つまり、余りにも多くが語られたが、結局は空しかつたという感情ですね。だから、自分の敵対者と議論することはもはや流行なくなつています。自分の敵対者の議論の何が悪いのかを見つけようともはや努力しません。なにか印象的な理論であればすぐさま受け容れるのです。これは理解可能な傾向ですが、それが若い知識人たちの特徴的な印となるとすれば、悲しむべき傾向です。それは、知的水準と知的責任との没落を示しています。この種の反合理主義の無思想性の一例は、アナーキズムの現代の流行でしょう。確かにわたしたちは、官僚制の増大、そして国家権力の増大には反対すべきです。ただわたしに理解できないことは、国際的レヴェルではアナーキーが原子力戦争となることを認識しているはずの人たちが、原子力戦争に巻き込まれずに、国家的レヴェルでアナ！キーを持ちうる、と信じることができるということなのです。

(1) Bryan Magee, ed., *Modern British Philosophy*, London, Secker & Warburg, 1971, pp. 79-81.